

「エコライフ」という生活者価値

里山の自然と共生する暮らし

竹田 純一

Written by Junichi Takeda

三つの原風景

昭和三五年、私は東京都目黒区に生まれまし
た。学校が休みの間は、幸か不幸か家族の都合で
東京都町田市と新潟県下田村の三カ所を行き
来していました。作られていく都会の近代施設
と壊されてゆく里山の循環、そして、人が減って
ゆく山里の三つの風景を見ながら育ちました。

生活環境が整備され便利になってゆくこと、
物々交換や自給的な暮らしから、生活資材を
すべて購入する消費生活へと日本の社会は大
きく変化していきました。

自分が住んでいる地域の外から、日用品から
家まで、暮らし自体を買い求めた時代です。こ
のような社会の価値観は、もちろん現金や証券
が軸でした。多額の金銭を手に入れば何でも買
える、と通信していた時代です。

教育も仕事も規範も、足下の身近な暮らし
や自然から生まれたものではなく、外部から購
入する仕組みや経済、時間軸から生まれると
多くの人々が錯覚していた時代でした。

今森光彦さんとケビンさん

先日、写真家の今森光彦さんの工房を訪ね
たとき、今森さんから、昭和三〇年代の琵琶湖
の変遷と湖畔の里山の喪失の話をつかがいまし
た。私より五才年上の今森さんは、変化を客観
的にとらえ、カメラに写し続けてきました。失わ
れてゆく里山と生き物たちの関係、一つひとつ
の命を見つめる今森さんのまなざしに、驚きと
深い共感を味わいました。アメリカ生まれのケ
ビン・シヨートさんも、日本の里山の多様さに魅
せられて、かれこれ四半世紀、日本に暮らし

ます。「里山の神秘は、一生かかっても解明でき
ないジグソーパズルのようだ」という言葉にケビ
ンさんの感動が込められています。思い返して
みると、私の町田の原風景にも、たくさんの生
き物とジグソーパズルのような不思議な秘密が
隠されていました。



鎌倉の谷津

ふるさとの魅力と田んぼ

私たちのおじいさんおばあさん、そのまた祖父父母……。里山には、私たち日本人の祖先が、弥生時代に田んぼを始めて以来、ずっと絶えることなく続けてきた自然への働きかけがありました。豊かな森の恵みを受けて、山と里の境に湧きだす清水や沢水を巧みに活かした暮らしを営んできました。山の傾斜地には棚田を設け、谷あいには谷戸田を開き、湿地には沼田を設けました。それぞれ地形や風土に合わせて、たくみに水を蓄え、生計の基礎を築いてきました。毎年、平らな里の田んぼに水を引きこみますと、生き物たちは一斉に、浅くて安全な田んぼに卵を産みに来ました。カエルのナマメドジョウ、メダカ……。これらの生き物たちの存在は、水や堆肥とともに田や私たちの心を潤します。稲が穂をつけはじめる頃、田んぼから水を落とします。この営々とくり返されてきた一連の作業があったために、生き物たちは、農事曆に合わせて生活してきました。里山には、田んぼと溜め池、小川、沼や湖、陸と林が織りなす四季を通じた、緩やかな水のネットワークがあります。

里山の樹木と萌芽更新

田のまわりの草地や雑木林では、田んぼによく日が当たるように草刈りや枝打ちを行いました。

枝を払い、草を刈って落ち葉を集め、堆肥をつくるのです。さらに、一五年〜二五年周期で、根株だけを残して雑木を伐採することで、林の世代交代をさせていました。根株を残すことで、数年で枝が生え、その一部を残すことで、幹を太く育て、やがて雑木林が再生していきます。剪定された枝は、燃料や資材になります。枝払いや萌芽更新のための伐

採によって、椎茸のほだき、燃料、木炭づくりの素材がそろいます。林を常に新しい雑木林へと若返らせることで、人は燃料や道具、資材を得ることができ、開かれた林の中の空間では、生き物たちが飛び交う豊かな環境がつくられてきたのです。林の中は、毎年、順番に切られた結果として、根株だけの開けた空間から徐々に育った空間へと、林の緩やかな変化ができあがります。この林の多様性は、水辺の多様性とともに、生き物たちの生活環境を多様なものにしてきました。

さらに、田畑のまわり、裏庭や山に人々が植えたスギ、ヒノキ、キリ、トチ、竹、柿、梅、桜などの樹種や配置、暮らしに必要な本数なども、地域ごとに、また、家族や水田の面積、家畜の数などにより、自然環境の中での配置や広さが決められてきました。

里地里山の循環

家を建て、茅をふき、土を練り、縄や綿を紡ぎ、田畑を耕し、水を引くという人々の暮らし。このありようの中に、共生と循環の里地のメカニ



炭を焼く戸沢村

ズムが隠されていました。このあたり前の人々の営みは、世代を超えて営々と継承されてきた生活文化です。この仕組みが、二〇世紀の後半に断ちきられてしまいました。

人間以外の生き物たちにとっては、人の暮らし方の変化は自然環境＝生存環境そのものの変化であり、生存基盤の崩壊でした。営々と変わるこのなかた人の営みを、突然、人間が、人間の便利暮らしの快適さという観点から、自然との関わり方を変えてしまったわけです。里地里山の生き物たちは、遺伝子の中に、人間がこれまで行ってきた、田に水を張るという行為や、雑木林を更新するという行為を、自然環境としてとらえ生存してきたわけです。それも、弥生時代以降、数千年にわたった環境としてとらえ、里地里山の生き物の遺伝子が書き込まれていたのです。

最近の里地里山

山の樹木は単一化し、雑木林は更新されず、野鳥や昆虫が飛びまわっていた野や林はうっそ

「エコライフ」という生活者価値

うと茂り、山の田の水は枯れ、水路はコンクリートで固められ、農薬、化学肥料、ダイオキシンなどの複合的な変化によって生存環境は断ちきられました。人々の暮らしは変化し、現代文明は、生き物との共生の仕組みを見落とし、共生と循環の構図を破壊させてしまいました。

里地の生き物

「このままでは絶滅してしまいます。それは、里地の生き物だけでなく、共生と循環の仕組みを失った人間自身にとっても、やがて、地域内循環という基本的な生存のよりどころを失う可能性があります。私たちの先祖が継承してきた、私たち自身が持続的に生存していくための共生と循環の構図です。里地の生き物、そして人間の生存環境が完全に破壊される前に、私たち自身の手で、私たちの暮らしと環境を復元することが大切です。」

里地とは

一九九四年の国の環境基本計画に織り込まれた概念で、「山地自然地域」「里地自然地域」「平地自然地域」「沿岸海域」という区分で国土を分けた概念です。山地は、人の営みがないところ、平地は、農林漁業がないところ、この中

間としての「里地」は、農林漁業が営まれ、人と自然が共生した暮らしが営まれていた場所です。また、環境基本計画の中で環境省の定義は、循環型社会を前提としたライフスタイルの転換の上での概念でもあります。つまり、持続可能な社会の可能性は、里地にあるとした上で、この里地が存続しつるためには、食料と燃料が持続的に生産される地域内循環の仕組みが完結していなければなりません。この為の基盤とは、持続型農業への完全なトシヨンの転換、燃料や漁業資源を維持するための森林整備と河川の復元、風土の暮らしを基盤とした文化の継承と教育改革を行わなければ、環境省が「里地」に求めた機能を達成することはできません。



ハッチョウトンボ

新・生物多様性国家戦略

里地里山など中間地域という定義が設けられています。この里地里山は、絶滅危惧種の五割が生息している生物多様性の上で大切な地

域です。私たちが身近に親しんできたメダカまでもが絶滅の危機にあります。この里地里山をどう保全していくかが、生物多様性国家戦略にとって重要な鍵を握ってゆくこととなります。絶滅防止と生態系の保全、里地里山の保全、自然の再生、移入種対策が今後急速に求められています。

私の里山ライフ

生き物がたくさん住める環境を創造し、暮らすこと。雑木林の手入れをし、燃料や堆肥をいただくこと。田畑を作って汗を流し、五右衛門風呂に入る。かまどで炊炊きし、囲炉裏で杯を交わし、友たちと語りつこと。

私の里山ライフは、シンプルですが、実に多様な里山の自然と生き物たちに支えられた暮らしを全国各地に働きかけて創ることです。

◆竹田 純一(ただた・じゅんいち)

里地ネットワーク事務局長。一九六〇年東京都生まれ。中央大学法学部卒業。金融機関、英国技術開発シンクタンク、市民団体を経て現職。全国各地で、持続可能な社会・里地里山における共生と循環の地域社会づくりを実践中。著書は、『みなまたの歩き方』(合同出版)、『実践コミュニティビジネス』(中央大学出版)、『二一〇〇年未来の街へ』(小学館)など。